

バンディングかわら版（第3号）

鳥類標識調査（バンディング）で得られた成果をお知らせするニュースレター

鳥類標識調査（バンディング）とは？

番号入りの足環（標識）を野鳥につけて放鳥し、その後、その鳥が再発見されることで、移動や寿命について調べられる調査方法です。

世界各国で行われており、最も歴史の長い自然環境調査の一つです。日本では1924年に開始され、現在は環境省が山階鳥類研究所に委託し、多数のボランティア鳥類標識調査員（バンダー）が参加して調査が行われています。



野鳥に装着する足環。これを装着することを「標識」する、その個体が再発見されることを「回収」と呼びます。

注）この調査は、野生の鳥を捕獲するための法的な許可（鳥獣捕獲許可）を受け、実施されています。

標識調査からどんなことがわかるの？

絶滅危惧種ベニアジサシはどこで再発見（回収）されるのか

ベニアジサシ（右）は環境省レッドリストにおいて絶滅危惧II類（VU）に選定されています。日本では主に沖縄で繁殖します。巣立った雛は**国外へ渡って越冬し**、数年後に**繁殖のために日本に戻ります***。絶滅危惧種の保全には、繁殖地と越冬地の場所や、繁殖地間の個体群の交流の解明が重要です。



*繁殖開始年齢は3歳以上であることが本調査から判明しています。

沖縄県で標識した個体
写真協力：尾崎清明

日本の繁殖地で生まれた雛は「**国外のどこで越冬する**」のでしょうか？自分が生まれた場所に戻らず「**国内の別の場所で繁殖する**」こともあるのでしょうか？

5km以上移動したデータをみると、**回収地は「放鳥地の近隣」または「越冬地である豪州」の二つに大きく分かれました。**

注）n=184（1961年～2018年のデータのうち、右表説明の条件に該当する個体数）。

繁殖地：沖縄県内に戻るケースが大部分でした。

越冬地：精力的な調査が実施されている豪州クイーンズランド州で多数が発見されました。

繁殖開始年齢まで日本で確認されないことと合わせて考えると、それまでは越冬地の周辺で過ごしている可能性も考えられます。

限られた地域で生活する本種の保全には、繁殖地である国内各地域の関係者間の協力、越冬地との連携が重要といえます

より詳しく知りたい方は調査報告書（令和2年度報告書 p.32-34）をご覧ください。
(<https://www.biodic.go.jp/banding/report.html>)

鳥類標識調査にご協力ください！バンダーになりたい方、足環のついた鳥を発見した方、いずれも右記までご連絡ください。

宛先：〒270-1145 千葉県我孫子市高野山115
山階鳥類研究所 保全研究室 鳥類標識センター
電話 04-7182-1107 FAX 04-7182-4342
E-mail: BMRC@yamashina.or.jp

「放鳥時（0歳の雛）の県（標識県）」と「再発見された地域（回収県または国）」の組み合わせ（回収まで500日以上要した個体）に限定。県別に示した。

標識県	回収県(国)	例数
沖縄	沖縄	128
	福岡	1
	鹿児島	1
	豪州	48
福岡	長崎	2
	豪州	4

どんな鳥に何羽くらい足環をつけているの？

2019年に足環をつけて放鳥された鳥の総数は282種126,907羽（前年より9,957羽減）でした。上位3種は、アオジ（25,025羽）オオジュリン（12,708羽）メジロ（8,036羽）です。1961年から2019年までの累計放鳥数は、499種、約610万羽（6,108,529羽）となりました。



標識調査からどんなことがわかるの？

ツバメの渡来と繁殖の時期が昔よりも早くなっています！

写真協力：
大塚之稔氏(右)、
須川恒氏(下)



地球温暖化などの気候変動は、野鳥の渡りに影響を与えていることが知られていますが、アジアでの状況は調べられておらず、実態の解明が急務です。

最も身近な野鳥のひとつであり、**全国規模で長期の標識データがあるツバメ**を用いて、1960年代と約40年後の2000年代で、多数の成鳥と幼鳥・雛に足環をつけた時期を比べました。

合計で1960年代：N=16,821羽，2000年代：N=54,038羽を調べました。

成鳥も雛も

足環をつけた時期が半月ほど早くなっていました。
成鳥の渡来時期と繁殖時期の変化を反映しているようです。

1960年代 2000年代

成鳥に足環をつけた時期のピーク*1	5月初旬	4月中旬
雛に足環をつけた時期のピーク*2	5月下旬	5月上旬

*1: 日本に渡来する時期の指標、*2: 日本で繁殖している時期の指標。

*3: 気象庁のデータより算出された結果。引用論文より抜粋。

長期的な気候変動が、ツバメの渡来と繁殖の早期化につながったことが示唆されます。

1960年代よりも2000年代は気温が約0.8度上昇しています*3。
桜の開花やセミの初鳴きなどの早期化が知られており渡り鳥でも渡来時期の早期化が起きていると考えられています。

長期間の継続調査である標識調査のデータの特性を活用し渡り鳥の渡来時期の変化を客観的に捉えることができたのです。

より詳しく知りたい方は、以下の論文をご覧ください。

出口智広・吉安京子・尾崎清明 (2012) 標識調査情報に基づいた2000年代と1960年代のツバメの渡り時期と繁殖状況の比較. 日本鳥学会誌 61: 273-282. <https://doi.org/10.3838/jjo.61.273>